

最も古い外来語

豊泉 清

外来語を素直に解釈すれば、外国から入ってきた言葉と言
い換えられる。つまり外国から入ってきて日本語に定着した
言葉と定義できる。すると、ある外来語の元の外国語は何語
か、いつの時代に日本に伝えられたか、どんな経緯で日本語
に定着したかという、三つの観点から考察を加える必要があ
る。そこで身近な外来語を選んで身元調べを試してみた。

現代国語は外国語や外来語をカタカナで表記するのが原則
だが、明治時代には外来語を片端から漢字に置き換える風習
があった。子供の頃に、麦酒(ビール)、燐寸(マッチ)、瓦
斯(ガス)、硝子(ガラス)、煙草(タバコ)、煙管(キセル)、
基督(キリスト)、酒精(アルコール)、金糸雀(カナリア)、
提琴(バイオリン)、馴鹿(トナカイ)、仙人掌(サボテン)
などという漢字表記を目にした記憶がある。因みに浪漫は
ROMANCE(ロマンス)の「画廊はGALLERY(ギャラリー)

ー)の「簿記はBOOK KEEPING(ブック・キーピング)
の音訳と言われている。純粹の漢語のように見えるが、実は
英語の発音に基づいて、明治時代に日本人が創案した新しい
漢字表記である。

また明治時代には英語の意識も試みられた。
PHILOSOPHYの哲学や、ECONOMYの経済は明治時代に
当時の文化人が創案した新語だから僅か百年少々の歴史しか
ない。PHILOは愛する、SOPHYは知識というギリシャ語
に由来し、フィロソフィーを直訳すれば「知ることを好む」
という意味になる。またECOは家を、NOMYは法則を意味
するギリシャ語に由来するから、エコノミーは「家庭を支配
する法則」という直訳になるはずである。明治時代の知識人
は漢文の造詣が深かったようである。

余談だが、中国語は全て漢字で表記するから、外来語も片
端から漢訳している。電規(テレビ)、電腦(コンピュータ)、
導彈(ミサイル)、独軌車(モノレール)、巨刑害機(ジャン
ボ・ジェット機)などは漢字の醸し出す雰囲気から日本人で
も何となく理解できる。「カコーラを中国では「可口可樂」
と漢訳している。中国語で発音するとあたかもカコーラの
ように聞こえる。「口にすべし、楽しむべし」と解釈できるか
ら、発音と意味の両面から、商品の宣伝も兼ねて「三片溢満点
の名訳だと私は評価している」。

現在の外来語は戦後の米国の影響により、大半は英語に由来する。日本語には、原子力発電所を原発、健康保険を健保、土木建築を土建、私立大学を私大のように短縮して使う言葉が無数にあり、長い綴りの英単語もやはり日本語風に短縮して使う傾向がある。

エアコン (コンディション)

調節

パソコン (コンピユーター)

電算機

ゼネコン (コンストラクション)

建設

リモコン (コントロール)

制御

マザコン (コンプレックス)

劣等感

コンで終わる略語がいくつもある。語尾のコンだけは共通だが、元の英語は全て異なる単語である。若い世代が本来の英語の意味も知らずに最初からカタカナ表記の略語だけを口にしていくと、日本語も浅薄な理解で終わってしまう、言語感覚が鈍麻すると私は危惧している。

明治維新の開国政策により、西欧の文物が怒濤の如く日本に流入してきた。アレルギー、エネルギー、イデオロギーなどのドイツ語や、オペラ、ピアノ、ソプラノ、テンポ、ピッコロなど、音楽領域のイタリア語や、アトリエ、デッサン、ポーズ、モチーフなど、美術領域のフランス語は、その分野の専門家でなくても容易に理解できるほど広く一般庶民の間に定着している。アレルギーやエネルギーなど、ドイツ語の

発音が先に定着してしまったので、後から導入されたアラジーンやエナジーという英語の発音は日本語に定着できずにいる。因みに登山やスキーに関する用語はドイツ語が多い。ドイツ語圏のオーストリアから最初に技術や知識が導入されたためと言われている。ゲレンデ、ヒュッテ、シャンツェ、アイゼン、ザイル、ボーゲン、シュプールなど、登山やスキーの愛好家の間ではごく普通に使われている。

徳川幕府の鎖国政策でポルトガルやスペインの貿易商が追放され、オランダが長崎の出島で日本との貿易を独占した。オランダの文化が日本に流入し、無数のオランダ語が外来語として定着した。メス、オブラート、ピント、スポイト、ゴム、コップ、スコップ、ランドセル、アルコール、エーテル、ビール、コーヒーなど、オランダ語由来と気付かずに口に入っている言葉が意外に多い。メスを入れる、オブラートに包む、ピントがぼけるなど、オランダ語由来の外来語を含む慣用語表現もある。

オランダ語

英語

ビール

ピア

コップ

カップ

スコップ

スクープ

生ビールのビールはオランダ語風の発音で、ビアガーデンのピアは英語風の発音である。一ヶ国語の発音が同時に存在

して使い分けている珍しい例である。

オランダ語のコップは水を飲むガラス製の容器を指し、英語のコップはスポーツの優勝杯や、即席麵の容器などを指し、明らかに使い分けがなされている。昨今はアルコールを飲むガラス製の容器をグラスと呼ぶ人が多くなり、コップははやや古臭い印象を受ける。

オランダ語由来のスコップは土を掘る工具を指すが、最近では英語のシャベルの方が一般的である。スコップに相当する英語はスクープで、新聞社の特ダネという意味で使われている。他社を出し抜いて未知の情報を買っ先にスコップで掘り出したという状況の描写と思われる。オランダ語由来のスコップと、英語由来のスクープは同じ単語だが、発音やカタカナ表記が異なるために全く別の言葉と誤っている日本人も多い。

室町時代にポルトガルの宣教師や貿易商が渡来し、日本にポルトガル文化を伝えた。パン、カステラ、ポタン、カルタ、タバコ、カッパなど、四百年以上も使い続けていると、外国語臭さが全く感じられない。日本語に定着した西欧語由来の外来語の中ではポルトガル語が最も古い。

城郭の中心部にある高層の建物を天守閣という。ポルトガル語で神を意味するDEUS(デウス)が訛って天守と漢字で表記したと言われているから、天守閣もポルトガル語由来の

外来語と見なせる。

「ウンともスンとも言わない」という表現がある。全く反応を示さず、何の応答もない状態を表す言葉である。ウンは1を、スンは合計や集計を意味するポルトガル語に由来するという語源説がある。つまり最初から最後まで何も言わないと解釈できる。

他人の収入の一部分を奪ってしまつ行為を「ピンはね」という。ピンは英語のポイント(点)と同じポルトガル語に由来し、最初や最上のもや頭という意味でも使われるようになったと言われている。オランダ語のメスを入れるや、オブラートに包むなどと同様に、ポルトガル語も天守、ウンともスンとも言わない、ピンはねなど、妙な所で使われている。日本語の中の外来語は、ポルトガル語、オランダ語、英、独、仏、伊など、西欧諸国語が圧倒的に多いが、労働の達成目標という意味のノルマや、鯨ネタのイクラはロシア語に由来する。また市場のバザーはベルシャ語が、調味料のケチャップはマレー語が語源と言われており、少数ながら珍しい国の言葉に由来する外来語も混じっている。

長い歳月を費やして複数の外国語に由来する外来語が定着したために、日本語は語彙が豊富になり、表現力も幅広くなった。もしも日本語の語彙が源氏物語や枕草子などに登場する純粋の大和言葉だけだったら、現代の政治や経済や科学な

どは全く表現できなかったと思われる。外国語の濫用は嘆かわしいという人もいるが、外国語を消化・吸収して語彙を増やし、自家築籠中のものでして駆使できる懐の深さは、日本語の長所だと私は高く評価している。

六世紀の中ごろに百済の王仁という人物が仏典や千字文を我が国に伝えたという歴史の記述がある。漢字で書いた中国語が日本に伝えられたから、理論的には外来語の定義に当てはまるが、習慣的に漢字や漢語は外来語とは呼ばない。

達磨(だるま)と久遠(くおん)と老若男女(らうじやうなんにょ)という読み方に何か共通点があるだろうか。達は発達、上達、達人、達筆など、常に「たつ」と読むが、達磨の達に限って例外的に「だる」と読む。実は韓国語でも達磨を「ダルマ」のように発音する。また久遠も韓国語で「クオオン」のように発音し、男女(なんにょ)も「ナムニョ」のように発音する。つまり達磨や久遠や男女(なんにょ)など、仏教用語の読み方は、韓国語の発音が日本語に定着したと考えてよい。つまり達磨や久遠も韓国語由来の外来語と見なせる。歴史的に見ると、百済の人物が日本に漢字を伝えただから、日本人は最初に韓国語風の発音で漢字を学んだという仮説が成り立つ。

日本語の漢字の読み方には、呉音、漢音、唐書の三種類あると、国語の授業で教わった。

明	京	兵	正
漢音	めい	けい	へい
呉音	みょう	きょう	ひょう
韓国語	ミョン	キョン	ビョン

漢音読みよりも呉音読みの方が遙かに韓国語の発音に似ている。呉音読みは仏典と共に百済の人が最初に日本に伝えた発音だから、韓国語に似ているのも当然である。

漢音は呉音よりも後の時代に日本に伝えられた。日本語の漢字の読み方が複雑なのは、呉音と漢音が共存しているためである。例えば、京葉線の京は「けい」と読み、埼京線の京は「きょう」と読む。行列の行は「ぎょう」と読み、行進の行は「こう」と読む。もし漢字に一字一音の原則が貫かれていれば、国語学習は極めて楽である。

北海道の釧路追分原に棲んでおり、天然記念物に指定されている「丹頂」という鶴を韓国語でTURUMIのように発音する。日本語化するとツルミのように聞こえる。鶴見という地名は恐らく丹頂が棲んでいる土地に由来すると想像できる。また佐渡島に棲んでおり、やはり天然記念物に指定されている朱鷺(トキ)という鳥を韓国語でTACGIのように発音するから、トキの語源も韓国語と思われる。「朱鷺」は朱色の鷺という日本風の宛字である。

子供の頃「ペーコマ」という玩具で遊んだ思い出がある。

ペー「ム」を漢字で「貝独楽」と書き、貝を「べい」と読むから、韓国語の貝の発音の「ペー」に由来すると考えられる。現在のペー「ム」は鉄製だが、昔は恐らく円錐形の巻貝の貝殻を利用した独楽だったに違いない。

群馬県に小暮（こぐれ）と読む地名がある。高句麗の韓国語の発音の「コグリュ」に由来するという古代史の語源説がある。韓半島から渡来した人々が開拓した土地と言われている。

群馬県に勢多（せた）という地名もある。韓国語で鉄をセ、場所や土地をタあるいはトのように発音するから、セタは鉄の場所、つまり鉄を採掘する場所や、製鉄所が存在する場所と解釈できる。実際に勢多という地域で、古代に鉄を加工した土房の跡と思われる遺跡が発掘されている。全国各地に瀬田や瀬戸と書く地名がいくつもあるが、やはり韓国語の鉄に関連のある地名と解釈できる。

埼玉県に顔振（こづぶり）と読む峠がある。くねくねと曲がっている状態を表す韓国語の「コブル」に由来すると言われている。曲がりくねっている山道を指す韓国語の「コブル」に顔振という漢字を当てたと解釈できる。

瞬間的に光るピカリヤ、背が高いノッポも、韓国語に同じような発音と意味の単語があるから、ピカリヤノッポも韓国語由来の外来語と見なせる。熊（くま）、鳥（しま）、鍋（な

べ）蜘蛛（くも）なども韓国語とほぼ同じような発音である。

私の住む高崎市の郊外に観音山という小高い丘陵地帯がある。子供の頃は「観音」を旧仮名遣いで「くわんのん」と表記していた。関、官、冠、寛、貫なども旧仮名遣いでは「くわん」と仮名を振っていた。但し看、干、間、幹、簡などは旧仮名遣いでも現代国語と同様に「かん」と仮名を振った。現代国語で「かん」と仮名を振る漢字を、歴史的仮名遣いではなぜ「くわん」と「かん」と書き分けていたのだろうか。そこで前掲の漢字の韓国語の発音を調べてみた。

韓国語 日本語

KWAN くわん 観 開 官 冠 寛

KAN かん 看 干 間 幹 簡

驚く勿れ、韓国語の KWAN と KAN という発音が、旧仮名遣いの「くわん」と「かん」と完全に一致している。つまり「くわん」という表記は、韓国語の発音の忠実な描写と断言して間違いない。昔の日本人は韓国語の「くわん」と「かん」の違いが識別できたから、異なる仮名表記を当てたと思われるが、「くわん」は元来日本語に存在しない外来の発音だから、時代の流れと共に淘汰されて消滅してしまい、いつしか「かん」に一本化してしまったと推測できる。韓国語には、仮名文字でウワ、ワイ、ウエ、ウオなどのように書ける母音が何種類もあり、母音の数が日本語よりも遙かに多い。私が

小学生の頃は、「ワ行を」「わぬつゑを」と唱えており、現在は消滅してしまつた「ゐ」と「ゑ」といふ仮名文字も教つた。「い」と「ゐ」や、「え」と「ゑ」や、「お」と「を」も昔は異なる発音だつたと思われる。発音が異なるからこそ、異なる仮名文字を創案して表記したはずである。

葉(えふ) 甲(かふ) 合(がふ) 劫(こふ) 集(しふ) 雜(ぞふ) 答(たふ) 塔(たふ) 法(ほふ) 入(にふ) 立(りふ) など、現代国語で「う」と書くが、歴史的仮名遣いでは「ふ」と書く漢字があつた。韓国語は日本語と異なり、子音で終わる単語がある。例えばBで終わる発音は、日本人の耳には「ふ」のように聞こえる。前掲の「ふ」と書く漢字の韓国語の発音は全てBで終わっており、歴史的仮名遣いと韓国語の発音がびたりと一致している。「くわん」と「かん」の関係と同じように、「ふ」と書いた漢字も韓国語の発音の忠実な描写と考えられる。一般庶民の日常生活に縁の無い過去の遺物となつてしまつた歴史的仮名遣いは、韓国語の発音を忠実に反映している貴重な言語学の歴史資料として活用できると私は評価している。

私どもは外来語といつて、カタカナで書く西欧語だけと考へがちで、歴史を遡つても江戸時代のオランダ語や、室町時代のポルトガル語しか論じないが、仏教用語の読み方や、日本各地の地名や、歴史的仮名遣いの分析から、日本語に影響

を与えた最も古い外来語は韓国語という持論を強調してみた。古代日本史の謎を解く方法論の一つとして、日本語に定着した韓国語という視点も欠かせないと私は考えており、大いに興味を持って独学で韓国語の学習に情熱を傾けている。

余談だが、日本語の語彙の中から、カタカナで書く西欧語の外来語と、中国語に由来する漢字語と、韓国語が語源と思われる単語を除けば、残りは純粹の大和言葉と定義できそうだが、果たして純粹の大和言葉と断定できる言葉が、日本語の語彙の中でどのくらいの比率を占めているだろうか。日本語の語彙は数十世代に亘つて醸成された混血語だと私は空想している。生物学の領域に雑種強勢という概念がある。純血種より雑種の方が強い生命力を持っているという認識である。今後も外来語として新しく定着する語彙が増え続ければ、日本語の未来は薔薇色だと私は予想している。

